

大学生の読書文化に関する研究

～文系・理系の比較を通じて～

粒来 香 (東京工業大学)

○石島 繁裕 (東京工業大学大学院)

1. 教養教育と読書

新制大学は専門研究と教養教育とを二本柱として発足した。旧制高等学校が教養教育を担っていた戦前に関しては、筒井 (1995)・竹内 (1997) などが明らかにしているように、教養を身につけるうえで決定的なのは読書であった。旧制高校の「教養主義」とは読書を通して西欧の哲学や文学を修得し人格の完成をめざす態度だったのである。ところが、教養形成と深く関連している読書行動について、新制大学生を対象とした研究は極めて少ない。前掲の筒井 (1995) は「教養主義」が昭和四〇年代に衰退したとしているが、その後、どのような変化があったかは明らかにしていない。この時期の大学生の読書行動については「京都大学卒業生意識調査」(1996) が貴重な成果であるが、対象が文系学部に限られ部分的知見にとどまっていると言わざるを得ない。

以上を踏まえ本研究は、1969～88年卒の東京工業大学 (以下、東工大) 理学部卒業生と京都大学 (以下、京大) 理学部卒業生を主な対象とし、1960年代後半からの読書行動の変容を明らかにすることを目的とする。前述の京都大学教育学部・経済学部を対象とする調査データとの比較も行いつつ 1970年代以降の変化を探る¹⁾。データの概要は表1に示した。また、読書が卒業生の現在とどのように関わっているかも考察する。

分析に当たりサンプルを以下の3世代に区分した。全共闘世代 (1969～75年卒)・大衆化世代 (1976～82年卒)・共通一次世代 (1983～88年卒) である。

表1 データの概要

調査名	調査方法	調査時期	対象学部	対象者	回収数	回収率
京都大学卒業生意識調査	郵送法	1995年6月	教育学部 経済学部	1969～88年 卒業生	302 289	34.9% 33.0%
京都大学卒業生調査	郵送法	1998年1～2月	理学部	同上	250	24.3%
東京工業大学卒業生調査			理学部		337	25.7%

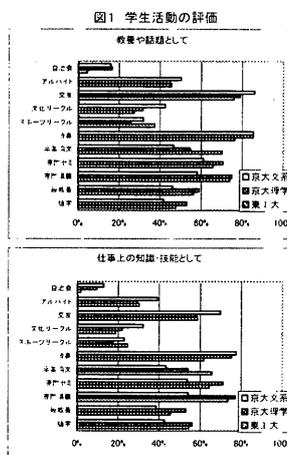
2. 大学での諸活動に対する卒業生の評価

大学での諸活動は卒業後どのように評価されているだろうか。調査では11の項目について「教養や話題」「仕事上の知識・技能」という二つの視点で質問した。図1は世代を分けずに、「プラスになっている」「どちらかといえばプラスになっている」の比率を学部ごとに示したものである。

「教養や話題にプラス」としていずれの学部でも高く評価されているのは読書と友人との交際である。理系では、それに専門的な知識 (専門講義・専門ゼミ・卒業論文) が続く。文系でも同様の傾

向があるが理系に比べ専門知識の評価が低い。

「仕事上の知識・技能にプラス」についても読書の評価は高い。文系では読書に次いで友人との交際が高く評価されているのに対し、理系では読書と同等もしくはそれ以上に専門的な知識が評価されている。文系と理系とでは卒業後に就く職業が異なるため「仕事上の知識・技能にプラス」と評価する活動が異なると考えられるが、いずれも読書に一定の評価を与えている点は注目される。それに対して一般教養の評価は概して低い。



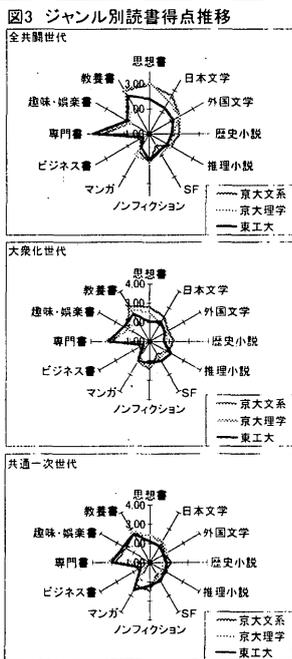
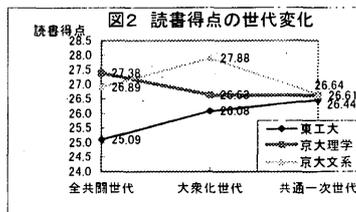
3. 読書行動の世代変化

在学中の読書が「熱心」「どちらかといえば熱心だった」とする比率はどの学部でも過半数を超える。読書は時代とともに減少したといわれるが、こうした読書実感の変化は必ずしも一貫した傾向にはない。これは読書実感と結びつく読書ジャンルが世代で異なることと関連している。各ジャンルと読書実感との相関係数を調べたところ世代によって認識に差異があることが分かった。どの世代・学部でも読書実感をともなうのは、思想書、日本文学、外国文学、教養書 (純読書グループ) である。逆に常に読書実感をともなわないのはマンガ、ビジネス書、趣味・娯楽書 (非読書グループ) となる。その他のジャンル (中間読書グループ) は世代・学部によって異なる。

次に、読書量の指標として各ジャンルごとに「よく読んだ」から順に4～1点で得点化し、12ジャンルの合計を総読書得点とした。全共闘世代の京大は東工大よりも総読書得点が高いが、共通一次世代になるとその差はなくなる (図2)。総読書得点の内訳をみると (図3)、全共闘世代では大学・学部によって異なっていた読書の型が大衆化世代で多様化し、その後共通一次世代ではジャンルの分布が似通っており、理系・文系を問わず画一化したと考えられる。

友人との会話については理系のみを分析対象とする。両大学とも、友人との会話で読書を話題に

した頻度が高いほど総読書得点も高く、東工大よりも京大で会話頻度が高くなっている。京大は東工大よりも同大学同学科の友人と読書を話題にしている他、同大学文系の友人との会話が多い。他大学やその他の友人は東工大の方が多くなっている。東工大は同学科に読書を話題にする友人が少なく、学内に文系の友人がいないため他大学等に会話を求めなければならない状況がうかがえる。しかし他大学の友人は時間的・空間的な制約を受け、それが東工大において友人との会話頻度を低下させている。世代変化をみるとどちらの大学でも会話頻度は減少しているが、東工大での減少がより顕著



である。両大学とも同大学同学科や同大学理系の友人との会話が減少する一方で、京大理学の共通一次世代で同大学文系の友人が増加する。これが京大での会話の減少をある程度くい止めたと思われる。

4. 読書と昇進

学生時代の読書経験は現在の仕事とどのような関係にあるのだろうか。ここでは1961年3月31日以前の出生者に限定し、サンプル数を確保するため京大・東工大の理学部を合計した。「昇進が良い方だと思うか、良くない方だと思うか」という質問に対する回答を、良い方から順に5～1点で得点化し昇進得点とした。

図4は「学生時代の総読書得点」「現在の総読書得点」「昇進得点」をパス解析した結果である。学生時代の読書は昇進に対して間接効果はあるが直接効果は

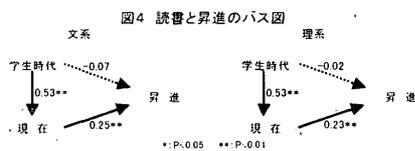


表2 タイプ別昇進得点

文系	ジャンル	継続型	離脱型	参入型	無関与型	
継続効果	ノンフィクション	0.31 *	-0.05	-0.22	-0.16	
	趣味・娯楽書	0.18	-0.33	-0.04	-0.02	
	日本文学	0.16	0.06	0.20	-0.16	
	歴史小説	0.24	0.34	0.34 *	-0.52 **	
	推理小説	0.31 *	0.19	0.26	-0.27 **	
	ビジネス書	0.34	-0.02	0.27 *	-0.39 **	
	継続非昇進	思想書	-0.35 *	0.09	0.38	0.09
	外国文学	-0.12	0.02	0.06	0.00	
	現在読書効果	教養書	0.17	-0.12	0.53 *	-0.03
	現在読書非昇進	マンガ	-0.09	0.06	-0.42	0.04
	専門書	-0.40 *	0.07	-0.42	0.17	
理系	日本文学	-0.04	0.14	0.04	-0.08	
	外国文学	-0.10	0.03	-0.09	0.00	
	推理小説	0.01	-0.04	0.02	0.01	
	マンガ	-0.11	0.20	0.26	-0.17	
	現在読書効果	ノンフィクション	0.10	-0.13	0.24 *	-0.13
	ビジネス書	0.12	-0.34 **	0.21 *	-0.19 *	
	専門書	0.10	-0.21	0.27	-0.34 *	
	趣味・娯楽書	0.00	0.00	0.22	-0.11	
	歴史小説	0.33 *	-0.14	0.03	-0.09	
	教養書	0.11	-0.28 *	0.02	-0.02	
その他	思想書	0.31 *	-0.10	-0.38	-0.02	
	SF	-0.34 *	0.22 *	-0.43 *	0.01	

認められない。同様の作業を各ジャンルについて行ったところ、どのジャンルについても直接効果はみられなかった。ただし間接効果の有無はジャンルによって異なる。現在の読書が昇進に影響があるのは教養書とビジネス書を除いた中間読書グループで、純読書グループは有意に働いていない。

さらに12ジャンルを学生時代「読んだ」「読まない」と現在「読む」「読まない」の2分位で「継続型」「離脱型」「参入型」「無関与型」に4分類し、各タイプごとに昇進得点の平均を求めた。この4タイプの平均昇進得点を各ジャンルの変数としてクラスター分析した結果、文系5グループ、理系4グループのクラスターが得られた(表2)。文系では、無関与と継続の双方が昇進にマイナスに働くジャンルが多く、つまり浅く広い読書が要求されているものと思われる。理系では昇進にあまりかかわらないジャンルが多いが、実用的なビジネス書・専門書・教養書、サラリーマン的趣味につながる歴史小説・趣味娯楽書といったジャンルが昇進にプラスの影響を与えている。

5 まとめ

若者の活字離れを嘆く声は多い。第2章で読書が高く評価されており、教養・話題としても、仕事の上でも役に立っていると思われることが判明した。第3章ではいつも「最近の若者は…」といわれるが、その内実は変化しており、その変化が大学・学部間の差異を縮める方向に向かっていることが判明した。続いて第4章で昇進との関連を分析した結果、昇進という視点に関しては自分で読書と認識するジャンルがあまり昇進にはつながらず、逆にあまり認識しないジャンルの方が昇進につながっていることが示唆された。文系では幅広い読書が、理系では現在実用的な読書が、昇進にプラスに働いている。

学生が本を読まなくなったことは事実であるが、「活字を読むこと=良いこと」のような単純な図式は成立していない。昇進に限って言えば、読書への適度な関与の仕方があるということだ。もちろん読書だけが学生の活動ではない。大学における教養形成を論じるためには、他の諸活動との関連を踏まえて研究を深めていく必要があるだろう。

1) 京都大学・東京工業大学卒業生調査は平成9・10年度科学研究費(研究代表者 山口健二)の補助を受けて実施された。京都大学卒業生意識調査のデータ使用に当たっては京都大学教育学部の許可を受けた。

<主要参考文献>

- 竹内洋「立身出世主義」NHK出版(1997)
- 筒井清忠「日本型「教養」の運命」岩波書店(1995)
- 「大学のマス化段階における大学生の読書行動の変容についての実証的研究」研究代表者山口健二